



「室蘭地球岬」
増地 裕幸先生

十歯会報

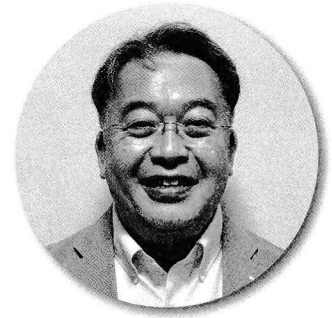
83号

2026.8月

一般社団法人十勝歯科医師会

人間というものは

(一社)十勝歯科医師会副会長 増地 裕幸 先生



倫理学とは、よく生きるための道德規範の探求である。現在、専門学校で医療倫理学を講義担当しているが、この機会を頂き医療者の道德規範、医療倫理を考察したい。

自身が先ず倫理学に触れたのは、遠い昔の高校の倫理社会だった。社会科教師は、人間味溢れる方で「僕は若い頃、ディオゲネスに会ったよ」等と時空を超えた虚言が教え子には人気で、哲学・倫理学を解かり易く説いてくれた。その影響から私の医療倫理講義は、古代ギリシア哲学の祖ソクラテスの「無知の知」から始まる。学生へ人生において「知らないことがある自分を自覚する」謙虚な気持ちは大事と。そして医学の父ヒポクラテスの誓いに入っていく。

医療倫理は「伝統的な医の倫理」と「新しい医の倫理」に大別される。前者は善行と無危害、後者は自律尊重と正義を原則とし、両者を合体させたものが生命倫理とされる。

医療倫理観は時代によっても変遷する。18世紀末に天然痘予防の種痘法で世界を救ったE・ジェンナー。使用人の少年に種痘を試すが、現代の医学研究の倫理ではアウト。しかし予防法の特許を取らず公開したジェンナーの偉業は損なわれるものではない。

20世紀初頭F・ゴルトンが提唱した優生思想。劣性とする人間への差別思想だが、世界各国の政策に反映された。異論が出なかった当時の倫理観である。そして2度の大戦では、生物化学兵器製造、生体実験など科学者・医療者が加担し、戦後に猛省する。

その後、科学・医療技術の進歩、また人権意識が高まることで、時代に即した数々の倫理宣言を発し、時を経て何度もアップデートしている。人類の戒めと決意のように。

伝統的な医の倫理では、医療者は患者への献身が職責とされたが、「医師のパターナリズム」といわれる患者との上下関係を生じた。そこで新しい医の倫理では「患者の権利」が重視され、「患者中心主義」という患者にチームで寄り添う並列の関係を目指すようになった。そしてエビデンスに患者のナラティブを組み入れる医療へさらに進化するが、人間は危い存在であることを忘れてはならない。「人間だもの」は本質を言い得ていて、医療倫理は医療技術・人権意識の進歩にこれからも併走を強いられる。

あるドキュメンタリー番組で、高齢の女性患者が家族に迷惑をかけたくない末に、自分の相談をAIにしているケースを見た。患者が「AIさん」と呼ぶAIは、若い優しい男性の声で傾聴し励まし、彼女には心の拠り所となっていた。

スタジオにいる医師は、「ここまで患者さんの本音を医療者が引き出すことは難しい。そのメリットは魅力。しかし医療的判断までAIに委ねる危険性は看過できない。」と。またAI研究者は「人間の過度なAI依存は問題視される。」という。AI倫理学の登場、また人間の悩みの種は蒔かれていく。

人間というものは…自身を振り返ってみても、まあそんなものである。